

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 永井聖二

学位：教育学修士

研 究 分 野

研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド

教育学、社会学

職業的社会化、教師生徒関係

主要担当授業科目

教育原理、教職概論

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 ① 青少年教育施設におけるボランティア活動による教師教育の実践	昭和58年4月～ 昭和60年4月	国立中央青年の家の受入事業として、教職をめざす学生のボランティア活動、体験活動をすすめるプログラムを開発、実践し、その成果と問題点を研究、発表した。フェリス女学院短期大学助教授柴沼晶子氏（当時）らとの共同の実践、研究。
2 作成した教科書、教材 ① 現代教育学の基礎（再掲）	昭和57年7月	現代教育学について広く解説した書籍である。 （担当部分概要）P102～P107 第6章2節「選抜・配分の機関としての学校」 現代社会における選抜と配分、社会移動と教育、現代日本の教育機会について、最新のデータにもとづいて解説。 （松島釣 編）（執筆者：松島釣、辻功、山本恒夫、高倉翔、永井聖二）
② 教育学要説（再掲）	昭和58年3月	教育学について様々な視点から論じている。 （担当部分概要）P91～P114 第4章「教員とその仕事」 教職の歴史的展開、教職の専門性の現状と課題、教育機器、授業分析などについて解説を加えた。 （清水幸正編）（著執筆者：清水幸正、小泉一太郎、細村迪夫、永井聖二）
③ 生徒指導と教育相談（再掲）	平成8年5月	今日ますます重要性をましている生徒指導のあり方について解説した。 （担当部分概要）P57～P70 第4章「児童・生徒の生活文化の理解」 現代の児童生徒の特質と理解のために必要な視点を明らかにした。 （編者：牧野禎夫、佐藤晴雄） （執筆者：佐藤晴雄、丸山義王、永井聖二、大久保了平、岩崎正吾、牧野禎夫、有馬廣實、熊丸光男）
3 教育上の能力に関する大学等の評価		該当なし
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他 ① 全国私立大学教職課程研究連絡協議会研究委員	昭和59年4月	第1期教師教育の開発研究にかかわる共同研究グループ担当（昭和61年3月まで）
② 全国国立大学教育実践研究関連センター協議会常任理事	平成5年10月	国立大学教員養成系学部等付置センターの教育方法改善プロジェクトについて検討 （平成8年3月まで）

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		

2 特許等		特になし
3 実務の経験を有する者についての特記事項		特になし
4 その他		特になし

研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 絆なき者たち	共著	昭和 50 年 12 月	人間の科学社 (全 184 頁)	(全体概要) 児童養護施設出身者の心理についての調査及び事例研究 (担当部分概要) P11～P140 第 I 部「絆なき者たちの軌跡」、 第 II 部「絆なき者たちの実像」養護施設出身者の心理及び処遇の現状について、その問題点を明らかにした。養護施設出身者に対する指導の在り方について、解説、提言をなしたものである。 (青少年福祉センター編) (執筆者：永井聖二、大嶋恭二)
2. 日本教員社会史研究	共著	昭和 56 年 6 月	亜紀書房 (全 628 頁)	(全体概要) 明治以降の日本の教員社会の社会学的研究 (担当部分概要) P577～P618 第 12 章「現代の教員社会と教員文化」現代教員のモータル・パースナリティーの分析をとおして、教員社会の規範及び文化を明らかにした。いわゆる潜在的カリキュラムについて、日本における現状を示したものである。潜在的カリキュラムの重要な部分である学校文化の検討から、学校の指導の在り方がおちいりがちな問題点について論じた。 (石戸谷哲夫、門脇厚司 編) (執筆者：寺崎昌男、門脇厚司、大坪嘉昭、石川辰彦、永井聖二)
3. 現代学校論	共著	昭和 57 年 4 月	亜紀書房 (全 263 頁)	(全体概要) 現代の学校の教師と生徒の状況についての社会学的研究 (担当部分概要) P221～P233 第 15 章「学歴社会と学校の機能」 現代学歴社会の病理と学校教育の機能障害について分析し、学校の新しい指導の在り方を明らかにしようと試みた。 (山村賢明、門脇厚司 編) (執筆者：山村賢明、門脇厚司、飯田浩之、伊藤敬、永井聖二)

4. 現代教育学の基礎	共著	昭和 57 年 7 月	ぎょうせい (全 493 頁)	(全体概要) 現代教育学について広く解説した書籍である。 (担当部分概要) P102～P107 第 6 章 2 節「選抜・配分の機関としての学校」 現代社会における選抜と配分、社会移動と教育、 現代日本の教育機会について、最新のデータにも とづいて解説。 (松島釣 編)(執筆:松島釣、辻功、山本恒夫、 高倉翔、永井聖二)
5. 教育学要説	共著	昭和 58 年 3 月	学苑社 (全 249 頁)	(全体概要) 教育学について様々な視点から論じている。 (担当部分概要) P91～P114 第 4 章「教員とその仕事」 教職の歴史的展開、教職の専門性の現状と課題、 教育機器、授業分析などについて解説を加えた。 (清水幸正編)(著執筆:清水幸正、小泉一太 郎、細村迪夫、永井聖二)
6. 教師教育の再検討	共著	昭和 60 年 9 月	教育開発研究所 (全 279 頁)	(全体概要) 教育改革の担い手としての教師像の明確化の必要 性と主要な論点について検討した。 (担当部分概要) P161～P181 第 6 章「専門職化と学校教育」 生涯教育構想のもとで新しい学校教育をめざす視 点から、今後の学校教育を担う教師の資質が、 果して教職のいっそうの専門職化によってもたら せられるのかを批判的に検討した。 (市川昭午 編) (執筆:池田秀男、名越清家、河上婦恵子、永 井聖二)
7. 現代教育社会学 講義	共著	昭和 62 年 5 月	学苑社 (全 224 頁)	(全体概要) 教育社会学の立場から現代の教育問題について論 じた。 (担当部分概要) P59～P82 第 3 章「学校と教師の社会学」 学校教育の病理と新しい学校論について社会学的 視点から論じ、新しい学校を担う教師の力量につ いて検討した。 (涌水幸正 編)(執筆:清水幸正、萩原元昭、 永井聖二)
8 現代の若い教師の 教育実践	共著	昭和 62 年 8 月	エイデル研究所 (全 258 頁)	(全体概要) 教育改革を担う若い教師の実践の特徴と課題につ いて検討した。 (担当部分概要) P123～P141 第 5 章「若い教師の職業的社会化」 現代日本の若い教師の現状と成長の課題について 論述した。若い教師の職業的社会化の規定因とし ての教師集団、教師文化、教師一生徒関係、教師 の役割葛藤などについて考究した。 (小島弘道 編) (執筆:小島弘道、土屋基規、中村龍兵、福田 誠治、名越清家、永井聖二、金子照基、川添澄子、 国吉哲郎、坂元仁志、松井映子、田辺裕二、吉村 達也、愛知一郎、森尚美、中村淳子、尾張尚、北 上正行)

9. 教育社会学	共著	昭和 62 年 12 月	日本教育図書センター (全 397 頁)	(全体概要) 教育社会学について様々な角度から論じている。 (担当部分概要) P85～P106 第 6 章「学校の組織と文化」 官僚制としての学校組織、チャーター理論、生徒文化と潜在的カリキュラム、教師文化などにつき、最近の研究成果を紹介した。 (陣内靖彦、名越清家 共編) (執筆者：陣内靖彦、名越清家、古賀正義、永井聖二、新井真人、清水賢二、中村清、新富康央、尾嶋史章、稲垣恭子、渡部真)
10. 現代教育の探究	共著	昭和 63 年 4 月	協同出版 (全 179 頁)	(全体概要) 現代の学校教育の特徴と課題を明らかにした。 (担当部分概要) P150～P162 第 8 章「教職の社会史」 明治初年の公教育制度成立から現代に至る教師と教職制度の変遷を社会的視点から明らかにした。 (伊津野朋弘 編) (執筆者：伊津野朋弘、古賀正義、永井聖二、葉養正明、大戸安弘、森茂岳雄、今井泰雄、川瀬邦臣、小笠原喜康、杉山精一、米沢正雄、秋川陽一)
11. 現代教育の理論と課題	共著	平成元年 4 月	小林出版 (全 189 頁)	(全体概要) 現代教育の方向性を示唆する理論を紹介し、開設した。 (担当部分概要) P156～P171 社会的事実としての教育、現代家族と子どもの社会化、社会における選抜機関としての学校などにつき、最近の研究成果を紹介した。 (金子照基、河野昌晴、馬場将光 編) (執筆者：金子照基、河野昌晴、馬場将光、永井聖二、村島義彦、上河一之、小山悦司、宮崎州弘、堀和郎、曾我雅比兒)
12. 教師教育改革の実践的研究	共著	平成元年 11 月	ぎょうせい (全 410 頁)	(全体概要) 教師養成と現職教育の今日的課題について明らかにした。 (担当部分概要) P51～P53, P72～P79 第 3 章「第 1 期 教師教育改革の事例研究」 2-1 問題の所在、 2-4 学生から見たプログラムの評価 青少年教育施設を利用した教師教育プログラムの開発、試行、評価について論じた。 (執筆者：宇田川宏、黒川昭和、栗原敦雄、沢村文雄、柴沼晶子、白井慎、永井聖二、松本憲、大谷時中、喜多川忠一、黒澤英典、坂本信昭、林義樹、樋口哲子、讃岐和家、仙崎武、土橋信男、高峰文義、坂本昭、大森正、加藤西郷、清水慶秀、三浦典郎、右島洋介、和田敏一、菅野芳彦、鈴木慎一)
13. 幼児の近所遊びの基礎的調査	共著	平成 2 年 2 月	多賀出版 (全 533 頁)	(全体概要) 幼児の近所遊びの実態について大規模な調査にもとづき検討した。 (担当部分概要) P63～P80 第 2 章「幼児の近所遊びの規定要因」 近年その衰退が問題視される近所遊びについて、数量化理論 I 類の手法によって、その規定要因を明らかにした。 (執筆者：萩原元昭、鎌倉雅彦、永井聖二、住田正樹、松原達哉、森楸、藤崎真知代、本田和子)

14. 人間形成と教育	共著	平成3年4月	第三文明社 (全217頁)	<p>(全体概要) 混迷する現代の教育の現状と改革の方向性について論じた。 (担当部分概要) P36～P48, P59～P96, P157～P173</p> <p>第1部 第4章「社会的事実としての教育」、 第5章「教育の社会的機能」、</p> <p>第2部 第1章「生涯教育論の展開と社会的背景」、 第2章「現代家族と子どもの社会化」、 第3章「教職の歴史と展望」、</p> <p>第3部 第4章「少年非行と校外生活」 教育の再生を願う立場から、現代の教育の主要問題について論じた。 (執筆者：村田鈴子、永井聖二)</p>
15. 教師が読む子どものための5日制	共著	平成4年6月	ぎょうせい (全236頁)	<p>(全体概要) 教育改革の焦点の一つとなっている学校5日制の問題点について論じた。 (担当部分概要) P63～P76</p> <p>第3章「学校5日制時代担う新しい教師像は」 社会変動のもとでの5日制の課題とそれを担う教師のあり方について論じた。 (編者：山村賢明、岡崎友典) (執筆者：山村賢明、岡崎友典、鈴木晶子、北澤毅、住田正樹、藤井美保、有吉捷郎、永井聖二、堀江静夫、桐谷澄男、上杉賢士、高田幸儀、大澤章子、鎌田一宏、石田昭彦、高城修身、手嶋義和)</p>
16. 開かれた学校と学習の体験化	共著	平成4年11月	教育開発研究所 (全342頁)	<p>(全体概要) 開かれた学校と学習の体験化の必要性を指摘し、試行的な実践例について紹介、検討した。 (担当部分概要) P281～P293, P320～P336</p> <p>第3章「4 横浜市における「自然教室」の展開」、 第4章「2 教師教育パラダイムの転換と新しい教師教育プログラムの可能性」、 児童生徒の生活体験の変化とそれに対応した教師の力量、さらにはそうした力量を養成する教師教育プログラムについて論じた。 (執筆者：柴沼晶子、栗原敦雄、永井聖二、安藤知子、長谷川純三、藤田恵、角替弘志、宮本一、鈴木慎一、林義樹、林部一二)</p>
17. 公立大学に関する研究－地域社会志向とユニバーサリズム－	共著	平成6年2月	多賀出版 (全301頁)	<p>(全体概要) 公立大学の現状と課題について地域社会志向と大学としてのユニバーサリズムの相克の視点から検討した。 (担当部分概要) P175～P189, P213～P219</p> <p>第4章「公立女子大学の学生文化」 第5章「公立大学と地域社会」のうち、 第1節、第2節、 公立大学の学生文化の事例研究をユニバーサリズムとパティキュラリズムの軸にもとづいて分析した。 (執筆者：村田鈴子、笹山忠則、永井聖二)</p>

18. 新学校教育全集・教職員	共著	平成7年7月	ぎょうせい (全320頁)	<p>(全体概要) 教師の今後の学校における役割について、さまざまな視点から論じた。 (担当部分概要) P33～P70 第2章「専門職論と教職員の職能」 教師専門職論の系譜と今日の学校教育を担う教師モデルとしての意義と限界について論じた。 (編者：永岡順、熱海則夫) (執筆者：小松郁夫、永井聖二、澤井昭男、若井彌一、篠原清昭、高倉翔、北神正行、小野英視)</p>
19. 生徒指導と教育相談	共著	平成8年5月	エイデル研究所 (全216頁)	<p>(全体概要) 今日ますます重要性をましている生徒指導のあり方について解説した。 (担当部分概要) P57～P70 第4章「児童・生徒の生活文化の理解」 現代の児童生徒の特質と理解のために必要な視点を明らかにした。 (編者：牧野禎夫、佐藤晴雄) (執筆者：佐藤晴雄、丸山義王、永井聖二、大久保了平、岩崎正吾、牧野禎夫、有馬廣實、熊丸光男)</p>
20. シリーズ・現代の教育課題に挑む学校改善新戦略	共著	平成8年7月	ぎょうせい (全265頁)	<p>(全体概要) 教育の転換期における学校改革の具体策について論じた。 (担当部分概要) P198～P215 第9章「地域・保護者と結ぶ」 地域と家庭の変容のもとでの学校のあり方について論じた。 (下村哲夫編) (執筆者：下村哲夫、有園格、星村平和、浅沼茂、佐古秀一、浅井経子、寺脇研、佐竹勝利、永井聖二)</p>
21. 個性の社会学	共著	平成9年6月	学文社 (全193頁)	<p>(全体概要) 教育改革のキーワードである「個性」について、社会的に検討した。 (担当部分概要) P145～P163 第8章「日本の教師－生徒関係と個性教育の展望」 日本の教師・生徒関係とその変容を個性教育のあり方とのかかわりで論じた。 (執筆者：萩原元昭、石戸教嗣、住田正樹、結城恵、古賀正義、岩瀬章良、飯田浩之、永井聖二)</p>
22. 学校と地域のきずな	共著	平成11年8月	教育出版 (全211頁)	<p>(全体概要) 地域教育をひらく学校のあり方について論じた。 (担当部分概要) P9～P23 第1章「『開かれた学校』を阻む力は何か」 地域社会の変容の中で「開かれた学校」への期待の高まりの背景を整理し、阻害要因としての教師文化のあり方について論じた。 (編者：葉養正明) (執筆者：葉養正明、永井聖二、有園格、木岡愛実、玉井康之、梶島邦江、屋敷和佳、高尾公矢、池田賢一)</p>

23. ≪教師≫という仕事=ワーク	共著	平成 12 年 9 月	学文社 (全 239 頁)	<p>(全体概要) 教師の仕事の社会学的な分析。 (担当部分概要) P9～P15, P167～P184, P213～P229 序 第 7 章『『学校文化』に埋め込まれる教師』 第 9 章「社会変動と教師モデル」 変容する日本の学校の教師役割の現状と変容の方向性について論じた。 (編者：永井聖二、古賀正義) (執筆：紅林伸幸、阿部耕也、清水睦美、瀬戸知也、秋葉昌樹、越智康詞、吉原恵子、永井聖二、古賀正義)</p>
24. 幼児教育リーディングズ	共著	平成 15 年 4 月	北大路書房 (全 191 頁)	<p>(全体概要) 幼児教育論の諸領域について概説し、研究動向を紹介した。 (担当部分概要) P50～P61 第 2 部第 1 章「教職の専門職論を探る」教師の専門職性について近年の論議を整理した上で、幼児教育教員の専門職性の現状と課題について論じた。 (執筆：深谷昌志、中田カヨ子、今井和子、大国ゆきの、永井聖二、宮下恭子、金城悟、埴和明、深谷和子、小林厚子、長畑正道、周建中、小原由美子、加藤理)</p>
25. 消費社会と子どもの文化	共著	平成 22 年 5 月	学文社	<p>(全体概要) 情報化と消費社会のなかでの子どもの文化と変容について論じた(編者：永井聖二 加藤理) (担当部分概要) P1～P11 文化としての子ども観と消費社会化のもとでの子ども文化の特性について論じた。(執筆：永井聖二、加藤理、川勝泰介、森下みさ子、畠山兆子、岩田蓮子他 4 名)</p>
(学術論文) 1. 日本の教員文化－教員の職業的 社会化研究－	単著	昭和 52 年 9 月	日本教育社会学会 編 教育社会学研究 第 32 集 P93～P103	大規模な質問紙調査の資料によって、日本の教員社会の規範を明らかにし、教員の職業的 社会化研究を飛躍的に前進させた。因子分析を用いた研究方法は、当時先駆的なものとして高い評価を得た。教員の成長過程につれて、生徒観、教授法なども変化する背景を説明する意図にもとづく論文である。
2. 現代の教員像	単著	昭和 53 年 1 月	青少年問題研究所 青少年問題 第 25 巻第 1 号 P22～P28	数量化Ⅲ類とクラスター分析を組み合わせた手法によって折出した現代教員の 4 タイプについて解説を加えた。
3. 日本の教員文化 の実証的研究 －教員の類型設定 を手掛かりに－	共著	昭和 53 年 3 月	筑波大学教育学系 論集 第 2 巻 P83～P109	林の数量化理論第Ⅲ類とクラスター分析を組み合わせた手法によって現代教員のタイプ分けをおこない、各々のタイプとデモグラフィック要因の関連を詳細に分析した。どのような教員が、生徒に対しどのような指導をおこなうのかというモーダルな傾向を明らかにしたものである。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (執筆：石戸谷哲夫、門脇厚司、永井聖二)

4. 教員社会化研究の現状と課題	単著	昭和 53 年 3 月	筑波大学教育学研究集録 第 1 集 P51～P61	教員の就業後の変容について、欧米および日本の先行研究を逐一吟味し、心理学的研究、社会学的研究の成果と限界について検討した。あわせて、今後の研究の課題を明らかにした先駆的研究である。教員が就職後、生徒観や教授法に対する考え方をどう変容させるかを明らかにしたものである。
5. 若い教師の研修需要に関する実証的研究	共著	昭和 56 年 3 月	筑波大学教育学系論集 第 5 巻 P73～P110	25 歳以下の若い教師を対象とする質問紙調査（1143 サンプル）の資料をもとに、若い教師の研修需要の現状、その規定因について実証的に検討した。今後の教科教育法の授業の改善に資するデータを示したものである。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） （執筆者：小島弘道、天笠茂、永井聖二）
6. 教員養成系学部卒教員の力量－開放制私大卒教員との比較から－	単著	昭和 59 年 5 月	群馬大学教育実践研究 第 1 号 P61～P70	学校教育の病理を克服するための新しい学校の在り方を検討し、新しい学校教育を担う教員の資質、力量との対比から現在の教員養成機関のアウトプットの現状を批判的に検討した。とくに、教員養成系学部（大学）卒業教員と開放制私大卒教員の資質力量の現状を比較、検討した。
7. 教育実習事前研究の実験的試行	共著	昭和 60 年 3 月	群馬大学教育実践研究 第 2 号 P171～P191	教育実習の質的充実をはたすため、適切な学習セットの形成を意図した実験的授業の実践の企画、実施、成果、および問題点について記録、分析、解明をこころみた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） （執筆者：比留間尚、多賀谷寿彦、永井聖二）
8. 教師教育制度改革の先導的研究	共著	昭和 61 年 3 月	私立大学教育実習研究連絡協議会 P1～P24	教師教育の今日的課題につき、大学での教師教育カリキュラムの改善、青少年教育施設を連携した教師教育カリキュラムの開発、地域連絡機構の在り方などについて論じた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） （執筆者：鈴木慎一、柴沼晶子、永井聖二、讃岐和家、土橋信男、坂本昭、高峰文義、仙崎武、大森正）
9. 幼児の近所遊びの規定要因	共著	昭和 63 年 3 月	群馬大学教育学部（科研費報告書、研究代表者萩原元昭） P37～P47	幼児の戸外での遊びについて、その量の規定要因と遊びが内包する人間関係の複雑さの程度の規定要因を、全国的規模の質問紙調査によるデータを数量化理論第 1 類によって分析することをとおして明らかにした。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） （執筆者：萩原元昭、住田正樹、本田和子、森林、永井聖二）
10. 教師専門職論再考－学校組織と教師文化の特性との関連から－	単著	昭和 63 年 10 月	日本教育社会学会編 教育社会学研究 第 43 集 P45～P55	1970 年代以降批判の多くなった教師＝専門職論の欧米での新しい論議の方向を検討するとともに、わが国の学校組織と教師文化の特性との関連でその「隠れた機能」を明らかにした。
11. 公立大学の存立構造に関する研究	共著	平成 3 月 3 月	群馬県立女子大学紀要 第 11 集 P78～P86	（全体概要） 公立大学の存在の意味はどこにあるのかさまざまな論点を整理し、あるべき姿を論じた。 （担当部分概要） 第 3 章「公立女子大学の学生文化」 全国の公立女子大学 6 校を対象とする質問紙調査にもとづいて、「隠れたカリキュラム」として重視される公立女子大学在学者の学生文化の特性とそのバリエーションについて論じた。 （執筆者：村田鈴子、永井聖二）

<p>(その他) [翻訳]</p> <p>1. 言語社会化論</p> <p>2. 教育伝達の社会学</p>	<p>共訳</p> <p>共訳</p>	<p>昭和 56 年 6 月</p> <p>昭和 60 年 6 月</p>	<p>明治図書</p> <p>明治図書</p>	<p>バーンステイン, B. 著 (担当部分概要)P149～P171 第 7 章「社会的学習に対する社会言語学的アプローチ」 学校への子どもたちの適応について、言語コードの視点から問題を提起したバーンステイン教授の論文集の本邦初訳。 (共訳者：萩原元昭、飯田浩之、望月重信、小谷悠紀子、永井聖二)</p> <p>バーンステイン, B. 著 (担当部分概要) P65～P78 第 2 章「教育における儀礼」 階級概念を中心に、類別(classification)と枠づけ(framing)という分析概念を学校の構想的側面と経過的側面とに適用し、文化再生産にはたす学校教育の役割を明らかにしたバーンステイン教授の代表作の翻訳。 (共訳者：石戸教嗣、佐藤智美、平塚芳隆、秋永雄一、萩原元昭、永井聖二)</p>
<p>[調査]</p> <p>3. 第 2 回東京都青少年基本調査報告書</p> <p>4. 第 2 回東京都子ども基本調査報告書</p> <p>5. 第 3 回東京都青少年基本調査報告書</p> <p>6. 大田区の子どもの校外生活の実態と意識に関する調査研究報告書</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>昭和 55 年 9 月</p> <p>昭和 56 年 9 月</p> <p>昭和 58 年 9 月</p> <p>昭和 58 年 12 月</p>	<p>東京都民生活局</p> <p>東京都生活文化局</p> <p>東京都生活文化局</p> <p>大田区教育委員会</p>	<p>(全体概要) 東京都の青少年の意識、行動の大規模調査の報告書。 (担当部分概要) P47～P68 第 4 章「在京青少年のライフステージ分析」(1) —男子について— 大都市の青少年の意識・行動の特性を大規模な質問紙調査と多変量解析によって明らかにした。 (執筆者：門脇厚司、木村敬子、飯田浩之、石川辰彦、永井聖二)</p> <p>(全体概要) 前掲第 1 回調査の続編 (担当部分概要) P43～P55 第 2 章「中学生の生活と意識」 大都市の中学生の生活と価値観について、大規模な定量データによって解明した。 (執筆者：門脇厚司、萩原元昭、副田あけみ、飯田浩之、永井聖二)</p> <p>(全体概要) 東京の青少年を対象とした時系列的調査の報告書。 (担当部分概要) P41～P73 第 3 章「在京青少年のライフステージ分析」(1) —男子について— 在京青少年をその生活構造の同質性から 5 つのライフステージに分け、その各々について生活構造の特徴と意識の特性を明らかにした。 (執筆者：門脇厚司、木村敬子、飯田浩之、石川辰彦、永井聖二)</p> <p>(全体概要) 大田区の子どもの意識、行動の現状についての報告書。 (担当部分概要) P3～P8 第 1 章「調査結果の概要」 地域の教育力の危機が指摘されるなかで、地域の成人、親、教師の協力の可能性について質問紙調査によるデータにもとづいて検討した。 (執筆者：萩原元昭、武内清、飯田浩之、浜名陽子、永井聖二)</p>

7. 生涯教育体制における学校教育のあり方に関する調査	共著	昭和 59 年 3 月	高崎市教育委員会	<p>(全体概要) 生涯教育体制のなかでの学校のあり方を検討する基礎的調査研究 (担当部分概要) P74～P90 第 7 章「生涯教育をめぐる教師文化の現状とその規定要因」 生涯学習、生涯教育を目指すうえで、教師たちの意識が阻害要因となる一面があることを、質問紙調査の結果にもとづいて論じた。 (執筆者：永井聖二、萩原元昭、新井郁男、古賀正義)</p>
8. 大都市青少年のニューメディアとのかかわりに関する調査	共著	昭和 63 年 10 月	東京都生活文化局	<p>(全体概要) 東京の青少年の意識調査報告書。 (担当部分概要) P85～P91 第 3 章の 2「中学生の自己評価とメカ」 現代の中学生のメカに対する自信が、学業成績を中心とする一般的な自己評価とかかわることを指摘した。 (執筆者：永井聖二、深谷昌志)</p>
9. 大田区における青少年の意識・行動に関する調査報告書	共著	平成 3 年 11 月	大田区教育委員会	<p>(全体概要) 大田区の青少年の意識調査報告書。 (担当部分概要) P21～P26, P158～P170 第 3 章「児童・生徒の学校生活と教師関係」 第 11 章「学校生活と対教師関係に関わる意識の構造と規定要因」 昭和 57 年調査との時系列比較によって、公立小中学校の生徒文化の変容を明らかにした。 (執筆者：永井聖二、萩原元昭、西園薫、鎌原雅彦、佐藤波郎、北沢毅)</p>
10. 第 6 回東京都子ども基本調査報告書	共著	平成 5 年 10 月	東京都生活文化局	<p>(全体概要) 東京都の子どもの意識と行動の調査報告書。 (担当部分概要) P82～P101 第 6 章「児童生徒の校外生活」 (執筆者：武内清、樋田大二郎、河野銀子、伊藤茂樹、渡部真、永井聖二、菊地栄治、吉原美恵、大野道夫、木村敬子、夏秋英房、望月重信、深谷野亜、布村育子)</p>
11. 第 7 回東京都子ども基本調査報告書	共著	平成 8 年 10 月	東京都生活文化局	<p>(全体概要) 前掲調査の続編 (担当部分概要) P85～P100 第 5 章「児童・生徒の校外生活」 (執筆者：武内清、樋田大二郎、河野銀子、鈴木匡、永井聖二、菊地栄治、吉原美恵、渡部真、夏秋英房、木村敬子、大野道夫、望月重信、深谷野亜、黄順姫)</p>
[辞書辞典] 12. 新生徒指導基本用語辞典	共著	昭和 59 年 4 月	明治図書 (全 287 頁)	<p>(全体概要) 生徒指導にとって必須の語句についてそれぞれの分野の専門の研究者が詳細に解説した書籍である。現職の教員にとっても分かりやすいように事例なども交えて論述している。 (担当部分概要) アノミー、協同・協働、社会化、社会性、習慣・習慣形成、生涯教育、人間関係・ヒューマンリレーションズ、人間疎外、相互作用、計 9 項目。 主として生徒指導の原理にかかわる項目を担当。 (宇留田啓一、加藤隆勝 編) (執筆者：宇留田啓一、加藤隆勝、永井聖二、他 42 名)</p>

13. 新教育社会学辞典	共著	昭和 60 年 3 月	東洋館出版社 (全 980 頁)	<p>(全体概要) 今日生じている様々な教育問題を理解し、その原因を探り、解決策を見出すためには、教育を社会的側面から眺める作業が欠かせない。本辞典はそうした必要性と、刻々変化する教育の事象に心をくばりながら、最新の研究成果をふまえて 2000 項目について解説したもの。</p> <p>(担当部分概要) 教師集団、教師文化、教師の職業的社会的他。主として教師に関する項目を担当するとともに、編集委員として辞典の編集を担当した。 (日本教育社会学会編) (執筆者：河野重男、新堀通也、永井聖二、他 328 名)</p>
14. 教育学用語辞典	共著	昭和 61 年 5 月	学文社 (全 293 頁)	<p>(全体概要) 激動期にある教育を理解するために、教育現実を客観的な社会現象としてとらえ、768 項目を新鮮な問題意識で精選。 中項目主義による体系的・包括的解説、学習・研究、受験や教育現場に必携の書。</p> <p>(担当部分概要) アイデンティティ、アカルチュウアレーション、逸脱行動、因子分析、他計 21 項目 (執筆者：深谷昌志、萩原元昭、門脇厚志、永井聖二、他 35 名)</p>
15. 教育経営ハンドブック	共著	昭和 61 年 8 月	ぎょうせい (全 492 頁)	<p>(全体概要) 教育経営学の重要な用語について解説し、研究の方向を示した。</p> <p>(担当部分概要) 高齢化社会、リカレント教育。 (日本教育経営学会編) (執筆者：小島弘道、平沢茂、永井聖二、他 106 名)</p>
16. 教育キーワード 90～91	共著	平成 2 年 5 月	時事通信社 (全 234 頁)	<p>(全体概要) 教育学を学ぶものにとって必要な用語についてそれぞれの分野の気鋭の研究者が解説したものである。教育学全般にわたって広く必須語句を収集しそれについて明解に論じている。</p> <p>(担当部分概要) 初任者研修、教師専門職論「再論」、ユニバーサル教育。 (執筆者：永井聖二、江川玟成、高橋勝、他 49 名)</p>
17. 教育キーワード	共著	平成 4 年 5 月	時事通信社 (全 234 頁)	<p>(全体概要) ますます複雑化する今日の教育現象の由来、背景を、キーワードを通して一つひとつ解き明かし、読者がそれぞれの場で教育を考え、実践するための視座を提供する。</p> <p>(担当部分概要) 教師の「ちから」、他 1 項目 (執筆者：永井聖二、望月重信、葉養正明、他 65 名)</p>

18. 現代保育用語辞典	共著	平成9年2月	フレーベル館 (全587頁)	(全体概要) 保育園、幼稚園の実践者、幼児教育研究者向けに基本用語を解説した (担当部分概要) 一対比較法、エスノメソドロジー、記述評定尺度、行動見本方、口話法、実地調査、相互作用論、単純集計、標本調査、計9項目を担当。 (岡田正章、千羽喜代子、綱野武博、上田礼子、大場幸夫、大戸美也子、小林美実、中村悦子、萩原元昭編) (執筆者：青井倫子、秋山和夫、安達喜美子、永井聖二、他330名)
19. 教育キーワード137(第8版)	共著	平成11年7月	時事通信社 (全320頁)	(全体概要) 現代教育を137のキーワードで解説した事典。 (担当部分概要) 教師の生涯学習、教師文化、燃えつきた症候群、計3項目各項目2頁 (執筆者：永井聖二、望月重信、高橋勝、他65名)
20. 新版学校教育事典	共著	平成15年2月	教育出版 (全756頁)	(全体概要) 学校教育に関するキーワードについて平易に解説した。 (担当部分概要) 懲戒、管理職、教員構成、教員需給、分限、不利益処分、計6項目 (執筆者：浅沼茂、東洋、麻生誠、永井聖二、他303名)
[雑誌論稿等] 21. 現代教師四つのタイプ	共著	昭和53年3月	学研 教育ジャーナル 第16巻第15号 P56～P60	4タイプについて、簡便法による自己診断方法を付して、現場教師の利用に便宜を計ったものである。 (共同執筆のため、本人担当部分抽出不可) (執筆者：永井聖二、門脇厚志)
22. 現代の教員タイプと教員文化	単著	昭和54年2月	共同出版 教職課程 第5巻1号 P36～P39	教員の社会に要求されるなかで、教員志願者が、やがていかなる教員となるかを予測し、問題を提起したものの。
23. 現代教師の教師観	単著	昭和54年9月	リクルート キャリアガイダンス 第11巻9号 P43～P47	現代教師の教師観の特徴について論じ、年齢別、性別の教師観の差異が大きいことを述べ、その内容について解説を加えた。
24. 若い教師の力量と研修需要に関する実証的研究	共著	昭和55年12月	協同出版 教職課程 第6巻第14号 P70～P73	(全体概要) 若い教師の力量の自己評価の特性を明らかにするとともに、若い教師の研修と職能的成長の可能性について論述した。 (共同研究のため、本人担当部分抽出不可) (執筆者：永井聖二、小島弘道、天笠茂)

25. 若い教師の力量と研修需要	共著	昭和 56 年 2 月	第一法規出版 学校経営 第 26 巻第 24 号 P64～P71	(全体概要) 上記内容を学校経営とのかかわりから整理したもの。若い教師の研修需要を高める学校経営を提案した。 (共同研究のため、本人担当部分抽出不可) (執筆者：永井聖二、小島弘道、天笠茂)
26. 「大都市における児童生徒の生活・価値観に関する調査」結果の概要	単著	昭和 56 年 11 月	東京都生活文化局 婦人青少年部 青少年問題研究第 125 号 P3～P20	「東京都子ども基本調査」のデータにもとづき、大都市の子どもの行動様式について、特性をまとめた。
27. 教職の専門職化と学校教育	単著	昭和 59 年 5 月	教育開発研究所 教職研修第 141 号 P43～P47	学校教育の危機が指摘されるなかで、新しい学校教育の在り方を模索し、教師専門職論のあらたな課題について論じた。
28. 青少年教育施設におけるボランティア活動と教師教育	単著	昭和 62 年 3 月	全国青年の家協議 会刊 青年の家の現状と 課題 第 15 集 P7～P18	青少年教育施設でのボランティア活動活性化の条件を検討し、ボランティア活動をとおしての学習援助者としての資質養成の可能性と問題点について論じた。
29. 生徒規則のとらえ方	単著	昭和 63 年 5 月	福武書店 モノグラフ中学生 の世界 第 29 号 P30～P36	生徒規則に対する中学校教師のとらえ方について、質問紙調査の結果にもとづき、その特殊性を明らかにした。
30. 都市青少年の遊びと仲間集団の機能	単著	平成元年 3 月	大田区教育委員会 大田区青少年対策 地区委員会だより 第 39 号 P1～P5	今日、衰退のめだつ都市青少年の仲間集団の動向と、それを再建するために必要な大人の援助の方向について論じた。
31. 書評「現代日本の教員文化の社会学的研究」	単著	平成元年 4 月	東洋館出版社 日本教育社会学会 編 教育社会学研究 第 44 集 P168～P172	久富善之編著「現代日本の教員文化の社会学的研究」(多賀出版)について、その分析の内容について教育社会学の教師研究の立場から紹介し、必要な提言をおこなった。
32. 免許取得基準引き上げの問題点	単著	平成元年 12 月	教育開発研究所 教職研修 創刊第 200 号記念臨時増 刊号 P104～P107	新免許法における基準の引き上げのメリットと問題点について論じた。
33. 体験学習と自主見学	単著	平成 2 年 9 月	福武書店 モノグラフ中学生 の世界 第 36 号 P72～P78	近年の修学旅行の目的だった流れである体験学習と自主見学について、その実態と教育的意味について論じた。

34. 課題研究報告「転換期の教師教育」	共著	平成3年6月	日本教育社会学会編 教育社会学研究第48集 P202～P205	(全体概要) 転換期の教師教育について、そのあり方を論じた課題研究の報告。 (共同研究のため、本人担当部分抽出不可) (執筆者：永井聖二、田部井潤)
35. 転換期の高校教師－現代に教師モデルはあるか－	単著	平成4年2月	リクルート キャリアガイダンス 第24巻第2号 P16～P19	従来暗黙のうちに学校教育を支えてきた機能的教育主体の弱体化のもとで、学校教育の再建の方向性を検討し、それを担う教師の在り方を論じた。
36. 増えるか教師のバーンアウト	単著	平成4年3月	福武書店 モノグラフ中学生の世界 P67～P69	日本ではこれまでさほど顕在化しなかったバーンアウト現象が、都市部を中心に増加しつつある傾向を指摘し、その問題性を論じた。
37. 公立大学と地域社会－その関係の現状－	単著	平成4年3月	公立大学研究会 P29～P33	公立大学と地域社会の関係について、現状と課題を論じた。
38. 教師は今－教員人生と教師教育	単著	平成4年4月	第一法規出版 学遊 P12～P13	社会変動と学校教育の危機的状況を背景として、教師教育のパラダイム転換の必要性を論じた。「実践研究者としての教師モデル」の重要性を指摘した。
39. 「5日制」学校経営の組織と運営	単著	平成4年6月	教育開発研究所 教職研修 創刊20周年記念増刊号 P160～P161、 P176～P177	「5日制」学校経営の課題について研究指定校の事例をあげて解説した。
40. 5日制と教育改革はどう関連するのか	単著	平成4年12月	明治図書 学校運営研究 P12～P13	学校5日制が教育改革全体のなかでいかなる意味をもつかを論じた。
41. 子どもの実態と教育環境をどうとらえるか	単著	平成5年3月	教育開発研究所 小学校教育 P48～P49	今日の社会のなかで、子どもの実態がどう変わったかを論じた。
42. 新学力と評価をめぐる最新情報	単著	平成5年6月	明治図書 学校運営研究 P52～P56	新しい評価のあり方について、多様な学力観とのかかわりを論じた。
43. 書評『公立中学はこれでよいのか』	単著	平成5年10月	日本教育社会学会編 教育社会学研究第53集 P205～P207	秦正春氏左記著書の書評。

44. 揺れる日本社会と人間形成－転換期の家族と学校－	単著	平成6年1月	藤沢市教育文化センター 教育情報ふじさわ 平成6年1月号 P14～P19	変わる家庭と地域とのかかわりで学校における教師－生徒関係の今後について論じた。
45. パラダイムシフト・教師＝専門職論の再検討	単著	平成6年2月	藤沢市教育文化センター 教育課題調査研究第5号 P27～P39	教師＝専門職論の課題と限界について論じた。
46. 社会の変化に主体的に対応できる能力の育成にどのような指導力が求められるか	単著	平成6年2月	教育開発研究所 教職研修第259号 P48～P51	社会変動のなかで、今後の教師のあり方について論じた。
47. 教育運営の論争点	単著	平成6年4月	教育開発研究所 教職研修 4月増刊号 P188～P189、 P218～P219	教育経営の今日的課題とその類型について解説を加えた。
48. 教師の指導力	単著	平成6年7月	福武書店 モノグラフ中学生の世界 第47号 P12～P55	質問紙調査の結果にもとづき、日本の教師の指導力観の構造を明らかにした。
49. 生涯学習機関としての学校をめざす学校運営の工夫をどう評価するか	単著	平成7年1月	教育開発研究所 「学校経営評価の実践課題と対応」 （「教職研修」1月増刊） P184～P185	生涯学習の構想のもとでの学校経営の課題を論じた。
50. 子どものやる気を失わせる教師	単著	平成7年2月	金子書房 「学習意欲を高める本」 （「児童心理」2月増刊） P36～P42	子どものやる気を引き出す教師を、教師文化と生徒文化のかかわりから論じた。
51. “地域に開かれた”教育課程を職業科高校はどう編成したらよいか	単著	平成7年3月	教育開発研究所 「新学力観に立つ5日制学校経営」 （「教職研修」増刊） P80～P81	地域と結びついたカリキュラム編成の課題について論じた。
52. 社会と子どもの変化に対応する学校のあり方	単著	平成7年6月	教育開発研究所 「性の問題行動と指導」（「教職研修」7月増刊） P23～P26	社会変動に対応した学校と教師役割について論じた。

53. 社会変化と中学生	単著	平成7年7月	ベネッセ モノグラフ中学生 の世界 第50号 P68～P80	中学生の考え方の変化について、質問紙調査の結果にもとづいて論じた。
54. 社会の変化への対応力を教師はどう身につけたらよいか	単著	平成7年8月	教育開発研究所 「変化の時代の学校経営」(「教職研修」8月増刊) P26～P29	社会変動のもとで、教師は生徒指導をどうすすめたらよいか解説した。
55. 教員のライフサイクルに配慮した教員人事をどう進めていくか	単著	平成8年2月	教育開発研究所 教職研修2月号 P92～P95	教員構成のバランスの視点から人事のあり方を論じた。
56. 価値多様化時代と教師の価値観	単著	平成8年6月	教育開発研究所 「価値観多様化時代のリーダーシップ」(「教職研修」6月増刊) P32～P35	価値の多様化の状況のもとで、生徒指導をどうすすめるか、解説を加えた。
57. 学校を活性化する人事異動	単著	平成8年7月	学事出版 月刊「高校教育」 7月号 P28～P33	人事異動の今日的課題を教員構成の不均衡の視点から検討した。
58. 教師としてどこまで価値をおしえられるか	単著	平成8年8月	教育開発研究所 「個性尊重時代の価値の教育」(「教職研修」8月増刊) P68～P69	価値の多様化のなかで、学校で価値を教えることの難しさを個性尊重とのかかわりで論じた。
59. 書評『変動社会の教師教育』	単著	平成8年10月	東洋館出版社 日本教育社会学会 編 教育社会学研究 第59集 P178～P180	今津孝次郎氏の著書の書評。
60. 学校のスリム化と教師の「ゆとり」への可能性	単著	平成8年12月	第一法規出版 学校経営 12月号 P19～P27	スリム化をすすめるうえで、教師のゆとりをどう確保するか、について論じた。
61. 学校のスリム化はどのような視点で考えればよいか	単著	平成9年2月	教育開発研究所 「『生きる力』を育む学校経営の展開」(「教職研修」2月増刊) P130～P133	スリム化の方向性について、議論の類型を示しつつ論じた。

62. 子どもの「いたみ」に寄り添う指導の可能性と限界	単著	平成9年2月	小学館 総合教育技術 2月号 P26～P29	カウンセリングマインドの意義と限界について論じた。
63. 学習意識の変容と問われる学校	単著	平成9年3月	藤沢市教育文化センター 教育課題調査研究 P21～P31	学習意識調査にもとづいて、子どもにとっての学校の意味を再考した。
64. 学校外の体験活動の推進をどう図っていくか	単著	平成9年4月	教育開発研究所 教職研究4月号 P54～P55	教育改革のプログラムにおいて、学校外の体験活動を推進する意義と具体的な留意点について論じた。
65. 書評「カリキュラムの社会学的研究」	単著	平成9年6月	ハーベスト社 日本子ども社会学会編 子ども社会研究 第3号 P139～P140	田中統治氏著書の書評。
66. 子どものゆとり	単著	平成9年7月	ぎょうせい 教育キーワード 「生きる力」の読み方 P44～P47	拡散した意味をもつ「ゆとり」とは何かを現代の子どもの視点から論じた。
67. 高齢社会の進展に対応した教育推進への条件整備をどう進めていくか	単著	平成9年9月	教育開発研究所 教職研究9月号 P88～P71	高齢社会の進展に対応した教育推進への条件整備をどう進めるかについて、中教審第2次答申の内容を分析し、解説を加えた。
68. 時代を見通せる“資質”かわかる本。教育者－改革者の足跡を知る・今後の方向を探る－	単著	平成9年9月	明治図書 学校運営研究 9月号 P26～P27	大正自由教育その他の教育改革者を紹介した著書数点を解説した読書案内である。
69. 待てない教育に問われるもの	単著	平成9年11月	金子書房 児童心理11月号 P23～P28	日本の学校文化としての効率主義の問題点について論じ、失敗経験の重要性を指摘した。
70. 「心の教育」を考える	単著	平成9年11月	学事出版 月刊高校教育 P42～P46	「心の教育」の意味を整理し、個性化、自由化モデルと異なる学校教育のあり方が必要であることを指摘した。

71. 地域の教育力向上のためにどのような施策を推進していくか	単著	平成9年12月	教育開発研究所 教職研究12月号 P70～P73	地方教育行政の見直しの視点の一つとして、地域の教育力向上のための具体的施策について論じた。
72. 体験活動を実施する場合の基本的な留意点にはどのようなことかあるか	単著	平成9年12月	教育開発研究所 「体験ボランティア活動の考え方・進め方」(「教職研修」増刊) P24～P25	「総合的な学習」の実践のために、体験的な活動をどう理解するかについて、基本的な考え方を論じた。
73. 学校を知る9冊	単著	平成10年1月	時事通信社 教員養成セミナー 1月号 P24～P25	現代日本の学校を理解するための著書9冊について解説した。
74. コミュニティーの育成と教育行政	単著	平成10年3月	教育公論社 週間教育資料 699号 P31～P33	地域と学校関係者が子どもにとって必要であり、それか地域社会の育成にもつながることを指摘し、条件整備の方向性を論じた。
75. 地域形成・振興と学校教師の役割	単著	平成10年4月	教育開発研究所 教職研修4月増刊 「教育委員会改革と校長の裁量権拡大」 P98～P101	学校と地域・家庭の協力の前提として必要なコミュニティの形成と地域の振興に、学校や教師はどうかかわるべきかを論じた。
76. 学級指導の伝統と個別的なケアの調和	単著	平成10年5月	明治図書 心を育てる学級経営 5月号 P8	子どもの「チャレンジ意欲」を学級指導の伝統と個別的なケアの調和によって育てることを提言した。
77. 教師の資質能力	単著	平成10年9月	時事通信社 教員養成セミナー 「教師」とは何か (9月号別冊) P54～P55	今後の教師の力量として、教師と生徒の個別的なかかわりの中から生まれる指導力が求められることを指摘した。
78. 地域差・学校差の考察	単著	平成10年9月	ベネッセ モノグラフ中学生の世界 第60号 P81～P89	質問紙調査の結果にもとづいて、現代日本の中学生の行動については地域差は大きい、意識の地域差は小さいことを明らかにした。
79. 少子高齢社会に対応した教育をどう位置づけ展開するか	単著	平成10年10月	教育開発研究所 教職研修10月号 P70～P73	教育課程審議会の答申とのかかわりで、異年齢の子どもたちや高齢者と子供たちのふれあいを学校で補う必要があることを論じた。
80. 必要なことは、教育内容の「厳選」ではなく、授業・指導方法の改善ではないのか	単著	平成11年1月	小学館 総合教育技術 1月号 P18～P19	新学習指導要領について、教育内容の「厳選」だけでは「わかる授業」はもたらされえないことを指摘し、指導方法の改善への努力の必要性を指摘した。
81. 自然体験・社会体験活動をどう取り入れるか	単著	平成11年8月	教育開発研究所 教職研修8月号 P88～P89	総合的な学習の時間において、体験的活動と教科学習を対立的にとらえることなく、両者の結びつきを求めることの重要性を論じた。

82. 地域住民の学校運営への参画をめぐる新しい対応課題	単著	平成 12 年 1 月	教育開発研究所 教職研修 第 329 号 P96～P99	学校評議員制を契機として、地域住民、親の教育要求を調整する専門家としての校長、教頭の役割について論じた。
83. 開かれた学校づくりと学校評議員制度	単著	平成 12 年 5 月	教育開発研究所 教職研修 第 333 号 P46～P49	「開かれた学校」を実現するために、教師が親や地域の大人と調整を図りながら学校を運営する専門家をめざす必要があることを論じた。
84. 若手教員の管理職への登用	単著	平成 12 年 8 月	教育研究所 「校長・教頭の教育戦略と経営力」 （「教職研修」増刊） P74～P77	個性的な学校作りを実現するために必要な校長のリーダーシップのあり方を論じ、年功序列的な管理職人事からの脱却を主張した。
85. 転換期の教師の意識－教師論の立場から－	単著	平成 13 年 6 月	ベネッセコーポレーション モノグラフ中学生の世界 vol. 68 P70～P77	教育改革の動向のなかで、中学校教師の教職観はどう変化し、何を志向しているのかを、質問紙調査の結果に基づいて論じた。
86. 専門家や関係機関、学校間の連携	単著	平成 13 年 12 月	教育開発研究所 学校管理職スキルアップ講座第四巻 P75～P78	「開かれた学校づくり」を進める学校経営をめざすために、専門家や関係機関・学校間の連携をどう進めるべきかについて論じた。
87. 地域の教育活動とかかわっていくうえでの留意点は何か	単著	平成 14 年 3 月	教職教育開発研究所 研修第 325 号 p72～p73	学校完全週 5 日制の実施に向けて、小学校において地域において地域の教育活動とどうかかわるべきかについて述べた。
88. 学校における体験活動の充実に向けどう改善を図るか	単著	平成 14 年 3 月	教職教育開発研究所 研修第 355 号 p48～p49	学校教育法の一部改正によって求められる体験活動をどう位置づけるべきか、注意すべき点は何かについて解説を加えた。
89. 規範意識と教師の指導力	単著	平成 14 年 6 月	教育開発研究所 教職研修総合特集 「子どもの規範意識を育てる」 p94～p97	子どもの規範意識の現状をふまえて、規範意識の形成のプロセスと教師の指導力の関係、そのあり方について論じた。
90. 規範意識の形成と教育（第二次大戦後）	単著	平成 14 年 6 月	教育開発研究所 教職研修総合特集 「子どもの規範意識を育てる」 p130～p133	わが国における第二次大戦後の社会の状況と子どもの規範意識の形成の危機について解説を加え、学校の対処のあり方を論じた。
91. 学校週 5 日制と児童回生徒をめぐる諸問題	単著	平成 14 年 6 月	東京書籍ニューサポ ート教育情報第 7 号 p4～p7	子どもの生活実態についての調査結果をもとに、学校週 5 日制の完全実施にどう対応すべきなのか、具体的に提言をおこなった。
92. 活字メディアとのかかわり	単著	平成 14 年 7 月	ベネッセ モノグラフ中学生の世界第 71 号 p23～p29	中学生を対象とした質問紙調査の結果に基づいて活字メディアとのかかわりの現状を示し、10 年前との比較をおこなった。

93. 学校教育に求められる体験活動	単著	平成 14 年 8 月	財団法人教育調査研究所教育展望第 48 巻 7 号 p24～p31	今日なぜ学習の体験化が求められるのか、学校では体験活動をどう位置づけるべきなのかについて論じ、体験学習と代理学習体験の関係について解説した。
94. 奉仕活動・体験活動の充実に向け校内体制をどう整備するか	単著	平成 14 年 9 月	教育開発研究所教職研修第 361 号 p30～p33	奉仕活動・体験活動の推進のために教職員がその意義を正しく理解する必要があること、保護者や地域の関係者との連携の仕組みを整える必要があることを論じた。
95. すぐ「できない」と言う子を生み出す学校	単著	平成 14 年 10 月	金子書房 児童心理第 66 巻 14 号 p23～p28	すぐに「できない」と言う子どもはなぜ増加したのかを日本の学校の集団児童の伝統とのかかわりから論じ、学習の個別化の必要性と課題を論じた。
96. 現代の中学生と活字メディア	単著	平成 14 年 12 月	日本ファイリング Better Storage 158 号 P8～P9	現代の中学生とさまざまなメディアとの関係を 10 年間のパネル調査の結果にもとづいて報告し、活字メディア離れの実態と問題点について論じた。
97. 学習意欲希薄な”普通の子”にどうアプローチすればよいのか	単著	平成 15 年 4 月	小学館 総合教育技術 第 58 巻 2 号 P14～P15	日本の学校の伝統的な集団単位の指導を生かしながら個別的なケアをすすめる重要性を指摘し、特にそれを”普通の子”にまで及ぼすことが必要であることを指摘した。
98. 中学生の学校観・学習観とその変容	単著	平成 16 年 3 月	ベネッセコーポレーション モノグラフ中学生の世界 VOL. 76 P26～P38	現代の中学生の学習観について、発達段階や学校の指導のあり方との関連で検討し、他律的な学習観の問題性について指摘した。
99. 規範意識の現状と課題	単著	平成 16 年 8 月	金子書房 児童心理第 58 巻 11 号 P42～P51	豊かな社会における規範意識の喪失の問題を論じ、小中学生での理由やプロセスに眼を向けた指導の必要性について述べた。
100. 学校選択制のもとでの選択行動の現状	単著	平成 17 年 3 月	ベネッセコーポレーション モノグラフ中学生の世界 VOL. 79 P18～P21	学校選択制が実施された地域における保護者の選択行動の実感を検討し、市場主義的な教育改革が何をもたらすのかを考えた。
101. 教師との関係～指導観の揺らぎと変容～	単著	平成 17 年 3 月	ベネッセコーポレーション モノグラフ中学生の世界 特別号 P25～P34	教師の指導観は、1990 年代以降どう変化したのか、その背景は何なのかを検証し、日本的教師生徒関係の継承すべき課題について論じた。
102. 社会教育の振興をどう進めるか	単著	平成 17 年 8 月	ぎょうせい教育基本法の改正で教育はどう変わるか P150～P153	改正教育基本法で社会教育の振興についてどう規定されたかについて、第 13 条を中心に解説した。
103. 若者の家族・結婚に関する意識	単著	平成 20 年 4 月	東京書籍の教室の窓 VOL. 24 P26～P27	少子化の背景ともなっている若者の家族観、結婚観についてデータにもとづいて論じた。
104. 子育てと夫の教育	単著	平成 21 年 9 月	東京書籍の教室の窓 VOL. 28 P26～P27	子育ての満足度と配偶者の帰宅時間や協力とのかかわりについて検討し、現代の父親の課題を探った。
105. 感情労働者としての教師のあり方—その成長と自己回復の場をどこに求めるか	単著	平成 22 年 4 月	金子書房第 63 巻 9 号 P79～P86	感情労働からの視点から現代の教師の多忙観の背景について検討し、日本的教師役割の無限定性の功罪について論じた。